

Topic!

都市防災教育研究センター(CERD) 副所長 三田村 宗樹

## ネパールでの防災教育活動へむけて

ネパール中部を震源として2015年4月25日に発生したネパール地震(Mw7.8)によって、ネパール中部の山地やカトマンズ盆地が強く揺れ、首都カトマンズでは、伝統的なレンガ造りからなるネパール建築の古い寺院や家屋が被災しました。国連によると被災人口は800万人にのぼるとされています。この地震災害をきっかけに、在阪のネパール支援者を中心となり、ネパール避難所・防災教育支援の会(NEPA、2017年NPO法人化)が結成され、CERDに対して、ネパールでの防災教育への専門的な事項での支援の依頼がありました。CERDではコミュニティ防災教室の国際ネットワークの拡大の一つとして、協力を了承し、カトマンズでの小・中学校相当の学校と連携してコミュニティ防災教室の実施へ向けて取り組みを進めつつあります。ネパールの文化・習慣・社会事情の日本との違いもあり、現在、連携を予定している学校の教員の方々への説明やアンケート調査を進めています。



カトマンズの小中学校施設への訪問



細い街路と被災したレンガ造建物(傾いた壁)

## 熊本地震に関する熊本県立大学の取組

熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 北原 昭男

熊本市内やその近郊には、地域特性を反映した伝統構法による都市型・農村型の木造住宅が存在していますが、熊本地震によって、壁のひび割れ・瓦のずれなどの軽微な被害から構造的な被害に至るまでの様々な被害が発生しました。被害を受けた家屋では修復・耐震改修等が必要となり、居住者は経済的・精神的に大きな負担を受けています。また、構造的な被害が大きくなかった家屋の中でも、修復をあきらめ取り壊されるものも出てきており、その建物を中心とした集落の景観が損なわれつつあります。居住環境学科では、被災された方々の助けとなるために、被災建物の構造調査を行い被害要因の解明を行うと共に、合理的な修復方法や耐震性能向上方策の提案を行っています。

一方、熊本地震震災後、KASEIプロジェクト(九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト)が発足しました。これは、九州・山口で建築を学んでいる学生と所属する研究室が、熊本地震の被災地に建設された仮設住宅地の環境改善活動を行い、居住者に安らぎのある住環境と、豊かなコミュニティを築くことに「加勢(かせい)すること」を目標としています。熊本県立大学は被災地に一番近い大学として、県内最大の益城町テクノ仮設団地を担当し、多くの学生が支援活動に参加しています。「みんなの家」で使用する家具作り、砂場や花壇の整備を行うと共に、自治会にも参加し、地域情報誌を住民と協働で毎月発行しています。



「被災建物の調査の様子」



「KASEIプロジェクト(砂場イベント)」

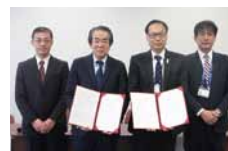
### 堺市と地域防災に関する連携協定を締結しました



堺市との協定締結式

これまでも堺市を対象とした公開講座、コミュニティ防災教室の実施や堺市の小学校区でのまち歩き訓練などを共同で実施してきましたが、今回の協定締結を機に、地域の防災力向上に加え、都市防災研究についても計画的かつ継続的に連携を進めていく予定です。

### 大阪市港湾局と港湾防災等に関する連携協定を締結しました



大阪市港湾局との協定締結式

近年の大規模化する災害や、今後の気候変動にも対応できる持続可能な港湾整備に対応するため、専門的な知見に基づいた未然防止策や減災対策など、港湾のさらなる防災力向上を図りながら、災害予測や先端技術を活用した防災研究においても連携を進めていきます。

# 「地域防災劇団プロジェクトによる防災・減災のこころみ」

都市防災教育研究センター兼任研究員(文学研究科フランス語圏言語文化学)

福島 祥行

大阪市立大学は、2013年から、地域のりびと(主として、住吉区民)とともに、地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニーをたちあげました。参加者は、公演ごとに入れかわりはあるものの、60代の方から小学校にあがるまえのこどもたちまで、文字どおり老若男女20名ほどで、月2回の夜間の稽古をかさね(本番前は連日)、これまで、毎年1回の公演をおこなってきています。当初は、「防災意識の啓発」を直接の目的としてはじまったこのプロジェクトは、しかしながら、おおきな軌道修正をへて、現在もユニークな取り組みをつけています。以下では、このプロジェクトの概要をしめしつつ、なぜ演劇活動が防災・減災につながるのかについて考えていきます。

## 1. スミヨシ・アクト・カンパニーの設立

2013年3月16日、大阪市立大学で開催された「地域防災フォーラム——いのちを守る都市づくり」の第1部「地域防災劇」において、地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニーは旗揚げしました。これは、生活科学研究科の森一彦教授(現・都市防災教育研究センター所長)の発案によるもので、そこに、東南アジアの音楽であるガムランの楽団を主宰してきた中川眞教授(当時、文学研究科教授)や演劇集団代表をつとめてきた福島かくわり、大学側の体制をととのえたのち、前年の12月に、地域の町会などをつづじてメンバー集めをおこない、年明けから活動を開始しています。もともとは、文字どおり「地域の防災意識をたかめる」ことを目的とし、巷間よくある「災害にあったときにはどう行動すればよいか」や「災害にあわないようにどう心がければよいか」といった、「防犯劇」のような実用的な演劇が構想されていましたが、じっさいに、ほとんどが未経験者のメンバーとともにひとつの演劇をつくっていくなかで、長年、音楽や演劇の現場にかかわってきた中川と福島の実験と、文化による復興を研究する中川、コミュニケーションや協働学習を研究する福島の知見により、「コミュニティ創発による文化による防災・減災」の場へとシフトしていったのです。

## 2. 文化による防災・減災

東アジアの音楽を研究していた中川は、2006年のジャワ島中部震災をきっかけとして、コミュニティ(共同体)復興に果たす文化の役割に気づき、文化や藝術のもつソフトパワーの重要性を指摘しました。そして、その知見を、2012年の東日本大震災に応用し、地域につたわる藝能・祭祀行事であった「神楽」を復活させることで、人びとを再度つどわせようところみします。いっぽう福島は、藝能や祭祀(=アート)の起源が、コミュニティを生成/持続させると主張してきました。ちなみに、英語の art はフランス語 art の借用語ですが、この語の語源はラテン語の <sup>アルス</sup>ars であり、「技、学問、知識、藝術」を意味していました。さらにこの語は ar- 「つなぎあわせる」ということばからできているので、ars はつないだり組みあわせたりするコトと、そこから生じたモノをさしていたと考えられます。つまり、art とは「つなぐコト/モノ」であり、そこから、大都市における藝能・祭祀の代替物としての演劇という発想が生まれました。すなわち、文化・藝術は、「人びとをむすびつける」ような、社会包摂 social inclusion、社会的紐帯 social relationship 機能をもっており、それによって、予期しなかったあたらしい共同体 community が、飛びだしてくる emerge(=創発する)というわけです。

## 3. なぜつながりをめざすのか?

演劇学の世界には、「演劇教育」というジャンルがあります。公演という目的地をめざすなかで、台本という他人の文章を読んでその世界観をくみとり、演出家という他人の指示をふまえ、役者という他人と協調して、他人になる演技をし、観客という他人の評価にさらされる演劇は、すぐれて「他者とのコラボレーション」を必要とする藝術といえるでしょう。それは役者にかぎらず、小道具や衣裳をつくる裏方であっても同じです。ひとつの芝居をつくりあげるには、数限りないやりとり=コミュニケーションが必要となります。そして、コミュニケーションとは、つねに、「自己」ひとりでは不可能な「他者」との協働作業ですから、演劇が、語学教育のみならず、市民教育の道具として、学校教育に採り入れられていることも納得のいくことでしょう。のみならず、演劇の稽古中や本番中には、役者も裏方も、既存の「知識」だけではなく、あらたな「知恵」も必要となります。公演中の突発事態には臨機応変に対処しなければなりませんし、それは準備中もおなじことです。また、協働活動(=コミュニケーション)は、お互いをよく知っていればいるほど、なめらかにすすみます。いっぽう、家族や町会や職場・学校といったコミュニティは、災害時の避難行動や、災害前の減災活動を円滑にします。演劇活動が防災・減災に役立つというのは、これらの点、すなわち、



- 1) 演劇集団というコミュニティが生じる
- 2) 他者との協働的 collaborative・協動的 cooperativeな活動の訓練となる
- 3) 突発的事態に臨機応変に対処する訓練となる

が理由にほかなりません。そして、このことの自覚が、「地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニー」の活動を、たんなる

防災劇上演のための一過性の集団とせず、演劇公演を第一の目標として持続的に活動するなかで、協働・協調し、臨機応変に対処できるようなメンバーが育っていき、さらにはそのつながりが地域に還元され、ひろがっていくことへと変化させたのです。

このように、「地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニー」というプロジェクトは、地域にはられた人的ネットワークや、臨機応変に協働・協調する力、問題が発生したときに思考停止せず他人と協力しながら乗り越えようとする積極性をつちかうことを目的としています。われわれは、どんなに明示的「防災意識」があっても、人のつながりがなければ、サバイバルできません。人と人のつながりがあれば、助けあい(共助)が生じやすく、すこしの防災・減災知識しか持たない人びとでも、補いあい、知恵を出しあうことで、サバイバルが可能となります。いうまでもなく、人間は社会的存在であり、その社会(=コミュニティ)こそが災禍を防ぎ、軽減するわけです。コミュニティをつくること、すなわち、人と人をつなぐことが、すべてのはじまりとなります。芝居をつくりあげるという創作活動は、そのひとつの実践にほかなりません。

## 4. スミヨシ・アクト・カンパニー公演記録

スミヨシ・アクト・カンパニーのこれまでの公演記録は、つぎのとおりです。メインキャストは地域の方々、とりわけ小学生たちですが、われわれ大学教員も複数回出演しています(生活科学研究科の生田先生、文学研究科の佐伯先生、中川先生、福島。旗揚げ公演には森先生も出演)。

### ・第1回公演『時のしずく—いのちを守るまち1』

作:スミヨシ・アクト・カンパニー、演出:福島よしゆき  
2013年3月16日、大阪市立大学学術情報総合センター10F大会議室  
(地域防災フォーラムの第1部として)、役者:20名(うち、子ども5名)



### ・第2回公演『ひかりはそこに—いのちを守るまち2』

作:スミヨシ・アクト・カンパニー、演出:福島祥行  
2014年4月5日、住吉区民センター小ホール、役者:21名(うち、子ども9名)

### ・第3回公演『星のつぶやき—いのちを守るまち3』

作:スミヨシ・アクト・カンパニー、演出:ふくしまよしゆき  
2015年3月21日、大阪市立大学学術情報総合センター10F 大会議室  
(地域防災フォーラムの第2部として)、役者21名(うち、子ども10名)



### ・第4回公演『時のしずくII—いのちを守るまち4』

作、演出:スミヨシ・アクト・カンパニー  
2016年2月21日、田中記念館、役者21名(うち、子ども10名)

### ・第5回公演『七夕のねがい—いのちを守るまち5』

作:佐伯嘉弘+スミヨシ・アクト・カンパニー  
演出:福島祥行+スミヨシ・アクト・カンパニー  
2017年3月4日、田中記念館、役者32名(うち、子ども20名)



### ・第6回公演『セカイノヒミツ—いのちを守るまち6』

作:佐伯嘉弘+スミヨシ・アクト・カンパニー  
演出:福島祥行+スミヨシ・アクト・カンパニー  
2018年3月4日、田中記念館

芝居の内容は、ストレートな防災劇でこそありませんが、いずれも、災害などの問題に遭遇した人びとが、助けあうことで、その問題を乗り越えるというストーリーになっています。

## 5. 芝居づくりをするなかでの工夫と気づき

演劇創作活動の実践のなかで、福島は、それまでのさまざまな教育・研究の知見を応用しています。たとえば、「おとな-子ども」「演出家-役者」「経験者-未経験者」のような権力階層構造をあえて崩していくことにより、メンバー間の関係性がフラットになるようにしました。このことにより、子どもがおとなの誤りを訂正するという、日常的には逆方向の活動が観察されました。これは、子どもたちであっても、いざというときには、自主的に判断して行動するという自律性の陶冶をめざしているからです。また、「○○ちゃんのお母さん」のような呼び方ではなく、個人のなまえ(とりわけ「下の名前」)や愛称で呼ぶことにより、「個人」として参加しているという意識を高めようとしています。これもまた、自律性と積極性を養うためです。この結果、子どもたちの「セルフ忘れ」などを、おとなたちがカバーしたり(こちらが断然おおいのですが)、おとなたちの「トチリ」を子どもたちがカバーしたりといった、いわば「コミュニティ共同体としてのレジリエンス(resilience=問題に直面したときのつよさ、修復力、耐久力)」が強まることがわかりました。人と人をつないでコミュニティをつくることは、自助・共助可能な、社会的つよさ(レジリエンス)を強める契機にもなるのです。いかがでしょう。みなさんも、演劇活動に参加する——のが難しいなら、まずは、となりの人と知りあいになるところからはじめてみてください。

## 室戸台風被害をきっかけとした教育塔

今年の10月は例年になく秋雨前線の影響と台風通過によって、大阪でも月降水量430mm、日降水量174mm(10月22日)と過去の記録を上回る降雨となりました。大阪での過去の台風災害といえば、1934年室戸台風、1950年ジェーン台風、1961年第二室戸台風などの被害が代表的なものとされています。この中でも、室戸台風は1934年9月21日に高知県を経て、午前8時頃に阪神間に達し、若狭湾に抜ける経路をたどり、高知上陸時の気圧が911hPaと本州通過台風で最も低い記録をもつものでした。室戸台風の被害を物語るものとして、大阪城公園の南西隅の本町通の北側に目につく大きな

「教育塔」があるのをご存知でしょうか?「教育塔」と示されていますが、学校始業時に台風の強風による木造校舎の倒壊によって、児童や教職員が多数犠牲になったこと(小学校内死者267名)から、その慰霊をきっかけとしてこの記念碑建立に至っています。現在は、学校授業時間内での児童・教職員の災害・事故・戦争での犠牲者などが合祀する式典が毎年10月最終日曜日に行われています。近年では阪神・淡路大震災や東日本大震災に関わる犠牲者も合祀されました。



大阪城公園南西隅にある教育塔

## コミュニティ防災教育

### 防災士養成講座・試験を実施しました

2017年9月30日(土)と10月1日(日)に、大阪市立大学にて、「2017年度防災士養成講座」を開催しました。この講座は、地域の方が防災士資格を取得するために必要な知識を、2日間の集中講義形式で学習してもらうものであり、47名の方が受講しました。講師は、本学教員と社会福祉協議会職員の方に担当して頂き、防災士の役割、近年の自然災害に学ぶ、地震のしくみと被害、耐震診断と補強、土砂災害と対策、災害情報の発信と入手、身近でできる防災対策、災害医療、災害とボランティア活動、被害想定とハザードマップ、

避難と避難行動、地域の自主防災活動と、防災に必要な知識が多岐にわたって講義されました。10月22日(日)には、台風が本州に接近している悪天候の中、防災士資格取得試験が実施され、本学学生も含めて53名が受験しました。今回の試験では全員が合格、という素晴らしい結果を得ました。防災士資格を取得された人には、地域や職場など、様々な場面で防災活動を展開していくことが期待されます。



防災士養成講座の様子

## 都市防災研究

### 防災・減災知の実践と共有

#### ■第4回都市防砂研究シンポジウム11月2日(木)

大阪市立大学文化交流室(学術情報総合センター1階)

#### ●平成29年7月九州北部豪雨災害調査報告

「平成29年7月九州北部豪雨の土砂災害調査報告」

三田村 宗樹・梅田 隆之介

「平成29年(2017年)7月九州北部豪雨災害と対策の現状」

伊永 勉・宮野 道雄

#### ●研究論文発表

「熊本県益城町の地盤調査と常時微動観測結果」

大島 昭彦・中村 優孝・平井 俊之

「大地震時を想定した大阪市からの一斉徒歩帰宅シミュレーション」

川岸 裕・瀧澤 重志

「降水予測の確からしさに関する基礎的研究」

重松 孝昌・中條 壮大

「市民の防災意識と防災行動に関する地域比較分析」

生田 英輔・佐伯 大輔・森 一彦



第4回都市防災研究シンポジウムの様子

## 地域貢献

### 第43回すみよし区民まつりにCERDブースを出展しました

2017年10月28日(土)に大阪市住吉区で開催された第43回すみよし区民まつりに出展しました。区民の方に楽しく防災を学んでもらうため、CERDブースでは「避難体力測定」と「防災工作ワークショップ」の二本立て。「体力測定」は脚筋力などを計測し、災害時に自力で避難できる体力があるのかが分かります。年齢の割に筋力がある方、そうでない方など皆さん楽しみながら測定されました。普段の運動が防災に役立つのかと、改めて気づかれたようです。「ワーク

ショップ」は大阪市立大学防災士クラブのメンバーが担当しました。身近にある段ボールや牛乳パックを使って、ヘルメットや食器を製作しました。参加した子どもたちは完成品に絵を描いたりシールを貼ったりして楽しんでいました。周辺には自衛隊や防災関連企業などのブースが並び、それぞれ趣向を凝らした展示でした。あいにくの天候でしたが、多くの来場者に恵まれ、和やかな雰囲気の中で防災を学んでいただけたと思います。



防災工作を楽しむ参加者

## 告知

詳しくはCERDホームページでご確認ください。



2018年2月17日(土) 14:00~17:00

### コミュニティ防災フォーラム2018

大阪市立大学杉本キャンパス 学術情報総合センター1階 文化交流室

地域防災に関心のある方は、ぜひご参加ください!

参加無料・申し込み不要 ※プログラムなど詳細は決まり次第、HPに掲載します

CERDの活動・お問合せは下記よりアクセスください

http://www.cerd.osaka-cu.ac.jp

office@cerd.osaka-cu.ac.jp

市大 CERD

検索



大阪市立大学  
都市防災教育研究センター

Center of Education and Research for Disaster Management